

『商売々々座談会 いらっしゃいませ 靴屋でございます。(その2)』

転法輪 私どもはお客様の足をみて、ぴったりわかるように、努めていますが、間違っても小さな靴は履かせないんです。ちょっと大きめの靴をお見せして、「お背の割に足が小さいですね」というと、確実に買ってくれます。……

レディメイドとオーダーメイド

記者 注文ものと既製品の比率はどのくらいですか。

荻津 お店にもよりますが、注文というのは比率からいったら、ほとんど問題にならないほど少ない。既製品オンリーに近くなってきています。

記者 既製靴も、今では非常に細かく分かれているようですから、その人の足に合うよう選んで買えるわけですね。……

映画は流行をつくる

記者 靴の流行はどのようにして作られますか？

荻津 春秋二回、ドレメ^{*1}、文化^{*2}その他服飾界の諸先生を招聘して、これから流行する色とかデザインを聞いて、それにマッチしたものを作っているんです。

記者 どのくらい前から準備するんですか。

荻津 秋の流行を六月頃に、研究会を開きます。

転法輪 映画の影響も大きいですね。

記者 そういえば、一時ハップバーン(カッターシューズの一種)が流行りましたね。

転法輪 「赤い靴」という映画があった

でしょう。あれが封切られた時に、タイアップして赤い靴の看板を出してくれといわれて、初めて赤い靴を沢山作ったんです。そうしたら忽ち売れていくんですね。赤い靴の流行は、あの映画からでしょうね。

稲川 あの時はうちでも、九割までが赤い靴でしたよ。(映画・赤い靴のプログラム・昭和28年・写真参照)

転法輪 それ以前はほんの店のアクセサリ的な存在だった。

稲川 その時を境にして、黒と赤と二通りの色になって、茶が売れなくなりましたね。

荻津 今の靴業界では、赤は固定色で、もう流行色ではなくなったでしょう。

浅田 最近はグリーン、ブルー、ピンクの靴、何でも革屋さんが上手に色を出すようになりましたからね。……』

※1 ドレスメーカー学院

※2 文化服装学院



昭和31年(1956)「婦人生活」5月号より掲載